

(様式4)

学位論文の内容の要旨

氏名 近藤健 印

(学位論文のタイトル)

Effects of a nurse-occupational therapist meeting on function and motivation in hospitalized elderly patients: A pilot randomized control trial

(入院中の高齢患者の日常生活機能と意欲に対する看護師 - 作業療法士会議の効果：パイロット無作為化比較試験)

(学位論文の要旨)

【背景】 日常生活活動や意欲の低下は、入院中の高齢患者に頻繁に生じる問題として認識されている。入院高齢患者の日常生活活動を支援する医療職種として看護師と作業療法士が知られている。この2職種の協働は入院高齢患者の日常生活活動の維持、向上に欠かせないが、その具体的な効果は十分に議論されていない。このパイロット無作為化比較試験では、日常生活活動に関連する運動機能および社会的認知機能、意欲の改善に対する看護師 - 作業療法士会議の有効性を評価した。これらを実証するために、本研究では地域包括ケア病棟を研究実施場所として設定した。地域包括ケア病棟は入院中に低下した日常生活活動を改善し、早期退院が主な目的である。それゆえ、看護師と作業療法士の日常生活活動に関する協働を実証するために最適な環境であると考えた。

【方法】 本研究は急性期病院に併設された地域包括ケア病棟で実施した。対象者の包含基準は、リハビリテーションを処方された患者及び65歳以上の患者であった。終末期がん患者と研究に同意を得られなかった患者を除外した。対象者を無作為に、コントロール群、看護師 - 作業療法士会議群（介入群）の2群に分けた。両群の患者の医療計画は、毎週の学際的なチーム会議で議論された。日常生活活動の問題の詳細は、看護師 - 作業療法士会議のみで議論された。看護師 - 作業療法士会議は、入院高齢患者の問題点や適切な改善策を明確にするために、**Situation-Background-Assessment-Recommendation**を用いて実施された。調査項目は、年齢、性別、住居形態、同居家族の有無、急性期病棟在院日数、リハビリテーション料算定区分、チャールソン併存疾患指数を基本属性として診療録より収集した。アウトカムは運動機能および社会的認知機能に機能的自立度評価法（**Functional Independence Measure; FIM**）を用いて評価し、意欲を**Vitality Index**を用いて評価した。評価は、地域包括ケア病棟入棟時と退院時に実施した。評価者は、各評価を熟知した作業療法士が実施し、患者がどちらの群に属しているかを知らせずに実施した。統計解析は、群内の比較にはウイルコクソンの符号付順位和検定を使用した。2群間の比較には名義尺度はカイ2乗検定、連続尺度はマンフォイトニーのU検定を用いた。有意水準は5%未満とした。本研究は研究実施施設及び群馬大学医学部人を対象とする医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】 地域包括ケア病棟に入棟した388名から、包含基準に当てはまらなかった96名、終末期の患者11名、同意がとれなかった患者245名を除外し、最終的に38名（コントロール群20名、介入群18名）の入院高齢者が研究に参加した。コントロール群は年齢85.0（IQR83.0 - 88.0）歳、男性9名、女性11名であり、介入群は年齢84.5（IQR76.0 - 89.0）歳、男性6名、女性12名であった。地域包括ケア病棟在棟の間、両群は同頻度のリハビリテーションが実施され、1日当たりのリハビリテーション実施時間はコントロール群56.5（IQR47.5 - 61.0）分、介入群47.0（IQR40.0 - 59.0）分であった。毎週の学際的なチーム会議はコントロール群に3.0（IQR1.5 - 5.0）回、介入群に3.0（IQR2. - 04.0）回実施された。それに対して、介入群に実施した看護師 - 作業療法士会議は1回のみの実施であった。地域包括ケア病棟在棟日数は、コントロール群は18.0（IQR12.0 - 37.5）日、介入群は23.5（IQR20.0 - 31.0）日であった。2群間の基本属性、初期評価には有意な差は認められなかった。群内比較では両群ともにFIM総得点、FIM運動合計点、各運動項目点（セルフケア、排泄管理、移乗、移動）は向上したが（ $p \leq .018$ 、 $r \geq .52$ ）、介入群のみFIM認知合計点、FIM認知 - 社会的認知、Vitality Index総得点、Vitality Index - 食事、Vitality Index - トイレ）が向上した（ $p \leq .046$ 、 $r \geq .47$ ）。2群間比較ではFIM認知合計点、FIM認知利得、FIM認知効率（ $p = .048$ 、 $r = .32$ ）とVitality Index総得点、Vitality Index - 食事（ $p = .027$ 、 $r = .36$ ）に追加の改善が認められた。

【結論】 運動機能はコントロール、介入群ともに向上し、コントロール群と比較して介入群では日常生活活動に関連する社会的認知機能と意欲にさらなる改善が見られた。これらの知見は、看護師 - 作業療法士の会議は、集中的なリハビリテーションを提供する入院環境における2職種間の新しい協働モデルを提示し、入院中の高齢患者の日常生活活動を改善する可能性があることを示唆している。